

群 教 七	G02 - 02
	平26.254集
	社会 - 小

根拠を明確にして考え、 表現する力を育てる社会科指導の工夫

— 資料を有効活用したノートづくりを通して —

特別研修員 宮崎 進也

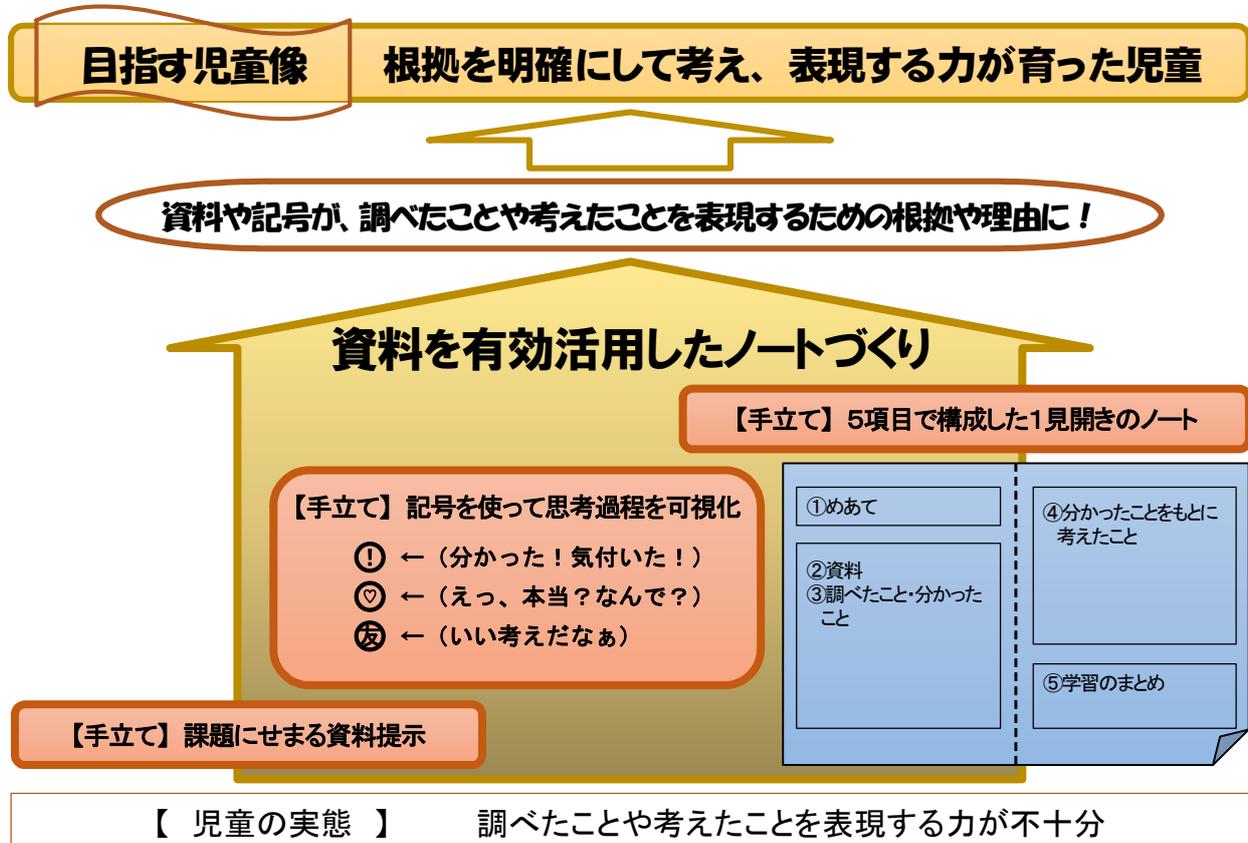
I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編では、いずれの学年においても、能力に関する目標の中に「調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする」ことが明示されている。つまり、表現力の育成が重視されている。しかし、本学級の児童は、調べた結果明らかになったことをもとに、既習事項や生活経験、他者の考えと比較・関連付けながら自分なりの見方・考え方をもち、それを文章に表すことに課題が見られた。

そこで、自分なりの見方・考え方をもちさせるために、資料を有効活用したノートづくりを行う。資料は、考えの拠り所となる情報を集めるために必要不可欠である。そのために、学習課題の解決に結び付く内容の資料を工夫して提示していく。そして、資料をもとにして、他者の考えも取り入れながら、学習内容や思考の過程が一目で分かるようにノートに記録していく。以上のようなノートづくりを行っていけば、自分の考えの根拠が明確となり、児童の表現する力が育つであろうと考え、上記の研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

単元「ごみのゆくえは、どうなっているの」において、根拠を明確にして考え、表現する力を育てるために、以下の手立てを用いたノートづくりを取り入れ、実践1を行った。

実践1における研究上の手立て

- ノートは1時間の授業で1見開きを使用し、「めあて」「資料」「調べたこと・分かったこと」「分かったことをもとに考えたこと」「学習のまとめ」の5項目で構成することを基本とする。
- 児童自身の課題として捉えられるように、本時の課題にせまれるような資料提示をする。
- 資料をノートに貼ったり、記号を用いたりして、学習内容や思考過程を可視化できるようにする。

実践1では、資料として町内にある最終処分場を取り上げた。最終処分場の複数の写真を用意したことで、児童はどのような施設なのか理解できたとともに、「平成34年までしか埋め立てられない」「いっぱいになったらどうする？」などのように、身近な課題として捉えることができた。そして、そこから本時の課題を設定し、自分にできるごみの減量方法について考えたり表現したりすることができた。しかし、課題を設定するまでに時間がかかり、資料や他者の意見をもとに考え、表現するための時間が不足してしまった。

そこで、単元「火事から人びとをどう守るの」では以下の改善点を付け加え、実践2を行った。

実践2における研究上の手立て

- 追究の視点が焦点化されるように、資料を精選して提示する。
- 本時の課題にせまれるような資料提示として、ゲストティーチャーを活用する。
- 考えたり、振り返ったりする場面で、記号を活用する。

実践2では、より効果的な資料として地域の消防団員を招いた。提示する写真資料は、ゲストティーチャーと相談の上精選したことで、本時の課題が焦点化され、スムーズに考える活動へ移行できた。また、ノートに書かれた記号を活用して意図的に指名をしたり、児童のつぶやきを生かしたりして、消防団はどうしてあるのかについて、考える根拠や理由を持たせることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 本時の課題にせまれるような資料提示をしたことは、児童の課題意識を引き出したり、思考や表現活動の際の視点を与えたりするために有効であった。
- 資料・記号を用いて学習内容や思考過程を可視化したことは、児童が事実と自分の考えを区別する上で有効であった。また、児童のアイディアで記号の活用が広がり、根拠の表し方が多様化した。
- 資料を有効活用し、5項目で構成した1見開きのノートづくりを継続した結果、児童は学習の見通しを持てるようになり、全体的にノートへの記述の量が増加した。また、資料や記号をもとに根拠を明確にして考えることができるようになり、調べたことや考えたことを表現する力が育った。

2 課題

- 新たな気付きや異なる視点を持たせたり、それを表現に反映させたりするためには、グループ活動を取り入れるなど、学習形態を工夫する必要がある。

3 資料を有効活用したノートづくりの更なる改善に向けて

- 比較・関連付けながら自分なりの見方・考え方を持たせるための方法として、ノートに貼る資料の提示の工夫が考えられる。1枚ずつ提示し貼付していくのか、全てまとめて提示するのか、また、資料を縦並びにするのか、横並びにするのかによって、児童の思考・表現の仕方が変化するであろう。

＜授業実践＞

実践 1

1 単元名 「ごみのゆくえは、どうなっているの」(第4学年・1学期)

2 本単元及び本時について

本単元では、ごみとは何か、ごみを捨てた後どうなるのかを話し合ったり、ごみの分別の様子を知ったりすることを通して、学習問題「なぜごみを分別しなければならないのか」を設定した。そして、この学習問題を追究していくために、清掃センターを見学したり資料を見たりして、燃えるごみや燃えないごみ、資源ごみなどのゆくえ、ごみ減らし対策などについて具体的に調べた。また、ごみ対策は計画的に、工夫を加えながら進められていることや、地域の人々の協力が欠かせないことについて考えた。本時は全14時間計画の10時間目にあたり、ごみを減らし、より暮らしやすい地域にするために、自分たちにできることを考えることがねらいである。

3 授業の実際

導入では、町内にある最終処分場の資料を工夫して提示した。まず、学校から見て最終処分場がどの方角にあるのか、また、どこに位置しているのかが分かるように映像で示した。児童からは「Y君の家のほうだ」「Rさんの家の近くだ」などの発言があった。また、「実はここに見える林のほうに最終処分場があります」と話すと、「こんなところにあったんだ」「知らなかった」などの発言が出てきた。

次に、複数の写真(図1、図2を含む5枚)を資料として提示した。そして、最終処分場の様子について分かったこと及び気付いたことは①、驚きや疑問に感じたことは②でノートに記述していった。なお、児童が調べやすいように、テレビ画面と黒板、ノートへの貼付と、同一資料を複数の方法で提示した(図3)。



図1 狸塚最終処分場



図2 施設内の看板

児童の記述例

- ①こんなに近くにあった
- ②焼却灰・不燃残渣ってなんだろう
- ①焼いた灰や全部燃えなかったごみを処分している
- ①すごく広い
- ①周りは草や柵に囲まれている
- ①平成34年まで埋められる
- ②いっぱいになったらどうする？



図3 資料提示の様子

記述後、児童は上記のような意見を発表していった。「①平成34年まで埋められる」という意見が出たときに、「なんでそれまでしか埋められないの？」と質問をした児童がいたので、全体にどうしてなのか聞いてみたところ、「埋めるところがないから」という予想が返ってきた。さらに、「②いっぱいになったらどうする？」という疑問につながっていき、児童からは「別の場所に埋める」「別の場所に最終処分場を造る」という声が上がった。そこで、教師から「別の場所はまだ決まっていないそうです。このままでは平成34年で本当にいっぱいになってしまいます。どうしよう？」と投げかけてみた。その結果、一人の児童が既習事項(分別することでごみの量が減少した)が書かれたノートを確認し、「ごみを減らせば、少し長持ちするかもしれない」と発言した。この発言により、児童自身の課題として本時のめあて「自分にもできるごみを減らすための方法を考えよう」を提示することができた。

その後、ごみを減らす方法を考えるための視点を与えるために、教科書を使って3R(Reduce、Reuse、Recycle)の確認をした。また、地域社会の一員として共にごみ問題を考えていく意識を持たせるために、

地域のごみ処理計画基本理念では、さらにRefuseを加えた4 R社会を目指していることを知らせた。

本時の課題である自分にできるごみ減らしの方法を考える場面では、様々なアイデアを引き出すことができるように、物を買うとき、使うとき、捨てるときなどそれぞれの場面で考えられるようにした。また、友達の見解の中でよいと思った考えには、⑤でノートに追加できるようにした。その結果、児童から多くの方法が提案された。そして、それぞれの方法の中で、最も効果的だと思うごみの減量方法に☆を付けさせて、それを選んだ理由を記述する活動を行った。本時では、図4のようなノートが出来上がった。

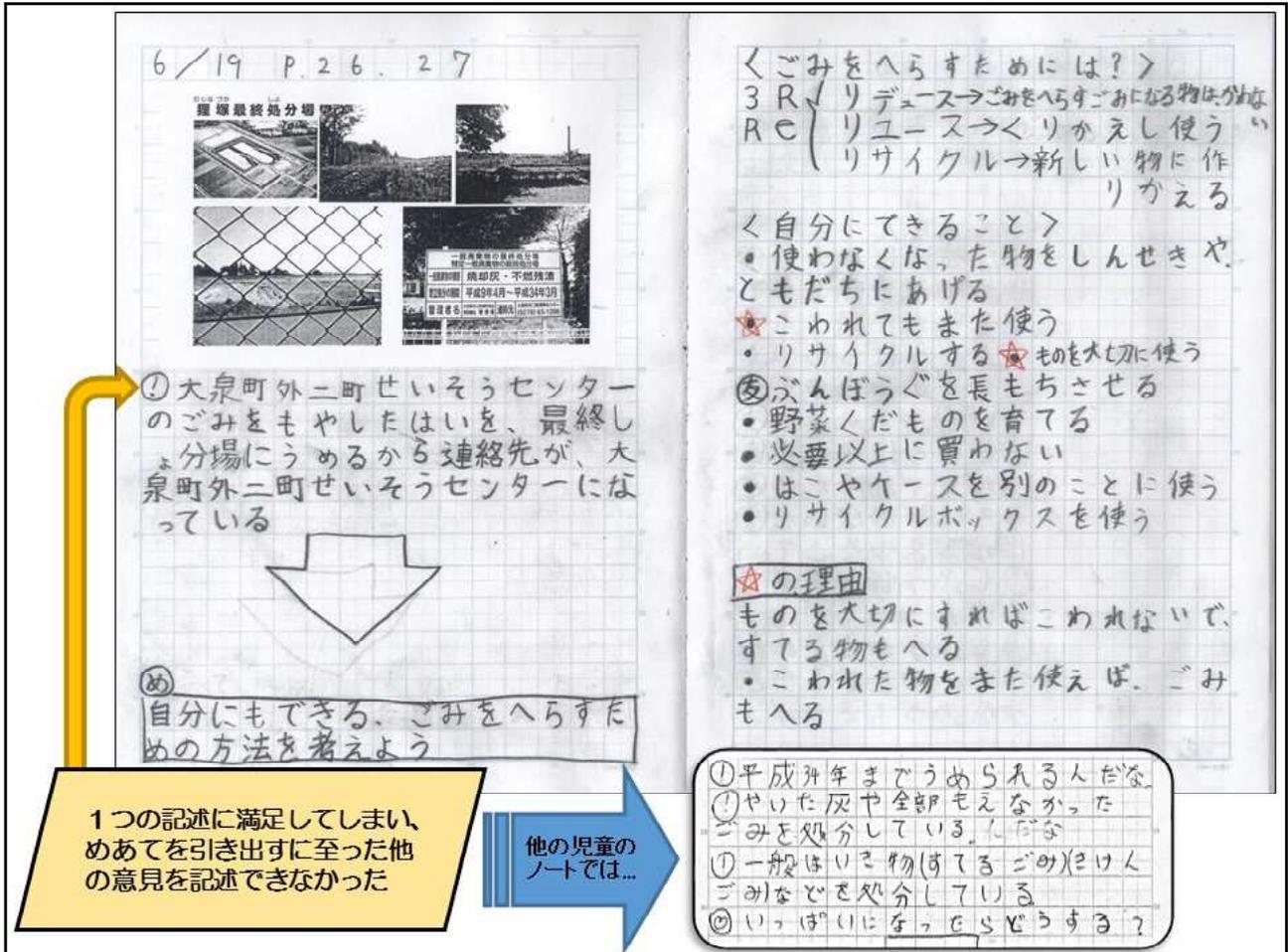


図4 「ごみのゆくえは、どうなっているの」(10/14)のノート

4 考察

本時の課題を考えさせるために、地域にある最終処分場を写真や映像資料として取り上げた。身近な場所に最終処分場という施設があることに驚きを与え、そして、その施設になぜ埋立処分の期限があるのかという疑問を持たせることができた。また、ノートの記述や児童とのやり取りの中で、めあてを引き出すことができ、児童に考える必要性を感じさせることができた。その意味で、地域の最終処分場を提示資料としたことは有効であったと考える。しかし、めあてを引き出すまでに時間がかかり過ぎてしまい、本題について考え、表現するための時間が少なくなってしまった。解決策としては、資料の精選が挙げられる。本時では、特に埋立処分の期間に限りがあることを伝えなかったため、前頁図2で示した写真を中心資料とし、その他の写真や映像は補助資料として簡潔に扱うべきであった。

記号を使って思考の様子を可視化したことは、児童が調べたことと考えたことを区別して表現する上で有効であった。しかし、ノートづくりの基本が徹底されているとは言えず、上手にノートづくりをしている児童をより積極的に紹介して、学びの意欲や表現力を高める方策が必要であった。また、「①を注意して振り返ってみよう」と投げかけたり、「①をもとに考えてみると…」と展開を工夫したりするような、記号の更なる活用方法を考える必要性を感じた。

実践 2

1 単元名 「火事から人びとをどう守るの」(第4学年・2学期)

2 本単元及び本時について

本単元では、火事の恐ろしさや消火の緊急性を感じたり、避難訓練等の経験を話し合ったりすることを通して、学習問題「火事から人々を守るために、誰がどんな活動をしているのか」を設定した。そして、この学習問題を追究していくために、消防署を見学したり資料を見たりして、消防署を中心とした緊急に対処する体制、火災現場での活動、火事に備える消防署の仕事や地域の消防施設・設備などについて具体的に調べた。また、人々の安全を守るための関係諸機関の働きと人々の工夫や努力について考えた。本時は全12時間計画の9時間目にあたり、ゲストティーチャー(消防団員、図5)を招いて実施した。資料や消防団の方の話をもとに、どうして消防団が必要なのかを考えることで、地域住民の協力によって地域の安全が守られていることに気付くことがねらいである。

3 授業の実際

導入では、スペシャルゲストとして消防団員の方に登場していただいた。服装は消防団の活動服である。ゲストティーチャーの登場に、児童は「えっ!」「本物?」「消防士だ!」などの驚きの声を上げたり拍手をしたりした。ここで「実は消防士ではありません。どんな人だと思いますか?」と切り返したところ、服装から予想して「警察」「運転手」などと答えた。消防団という答えが出てこなかったため、ゲストティーチャーに「消防団員です」と自己紹介をしてもらおうと、児童からすぐに「あの詰所の人?」「この前の調べ学習で消防団の詰所があった」の発言が出てきた。この発言により、児童は消防士とは別に消防団の人がいることを理解し、本時の学習課題「消防団はどうしてあるのか考えよう」をつかむことができた。

初めに、消防団がどんな活動をしているのかを調べた。提示資料は5枚である。実践1と同じ枚数ではあるが、ゲストティーチャーと相談し精選して提示したため、意見が拡散することなく調べることができた。なお、提示した写真は、**1**消火訓練の様子、**2**消防士と一緒に消火活動をする様子、**3**防災活動の様子、**4**消防車の点検の様子、**5**消火栓の点検の様子であり、児童はノートに右のような記述をした。分かりづらいことや詳しく聞きたいことは、ゲストティーチャーに説明してもらった。そして、一通り活動を確認したところで、意図的

指名によって◎の意見を引き出し、めあてに立ち戻ってから考える活動に入った。

消防団はどうして必要なのか考える場面では、活動を2段階に分けた。1段階目では自由に自分の考えを記述させた。すると、「消防士だけでは大変だから」「すぐ近くの人が消火できるように」などの意見が多かった。そこで、なぜ消防士だけでは大変なのか聞いてみると、「人数が足りない」という答えが返ってきた。さらに、教師から「消防署には何人の職員がいたか覚えていますか?」と尋ねてみると、「8人で2交代制だった」「全部で25人」と数名が答えた。このように、人数の話題が出てきたので、本時のめあてを考える新たな視点を持たせるために、二つの資料を用意した。一つは、町の消防署の職員数と消防団員数を知らせるものである。もう一つは、町の消防団が地域ごとに分かれていることを知らせるものである。この二つの資料と、家族に消防団員がいる児童の発言により、消防団は地域に住む人々がそれぞれの地域で活動していることを確認した。また、教科書を根拠にして「普段は家や店の仕事をしている」という意見を発表した児童がいた。この発言を受けて、「自分の仕事も大変なのに、なぜ消防団の活動をし



図5 ゲストティーチャー

児童の記述例

- ①火を消す訓練
- ①消防士と一緒に消火、消防士の手伝い
- ①水があふれないように防ぐ活動
- ①川や海の水が増えたときに備えて、袋を積んでいる
- ①消防車や道具の点検、修理
- ①消火栓の点検
- ◎なぜ消防士と同じような仕事をしているのか?
- ◎消防士がいるのに、どうして消防団があるのか?

ているのか？」と揺さぶりをかけて問い、地域住民の支え合いである共助の重要性に目を向けさせた。

考える活動の2段階目は、これら資料と児童の発言から導いた「地域の人々」と「普段は自分の仕事をしている」という消防団のポイントを押さえた上で記述させた。児童からは、「地域を守るため」「人も場所も守るため」などの意見が出てきた。そして最後に、児童の言葉を使って「地域の人々の協力によって、地域の大切なものを守るため」とまとめた。さらに本時は、共助の大切さを実感できるように、ゲストティーチャーに地域を守る思いや苦労について話してもらった。学習感想を書く際には、この話を生かして表現することができた。本時では、図6のようなノートが出来上がった。

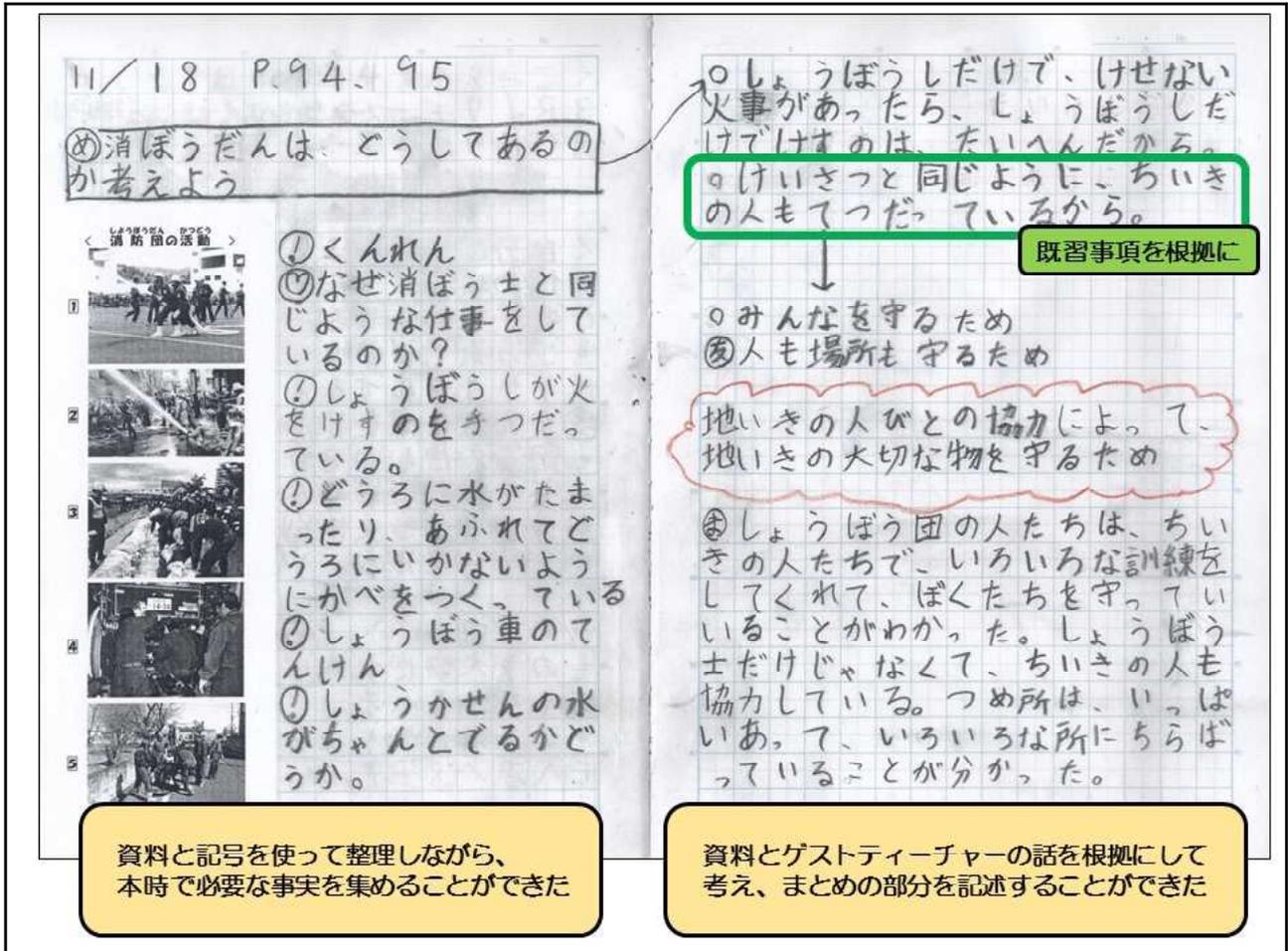


図6 「火事から人びとをどう守るの」(9/12)のノート<図4と同一児童>

4 考察

ゲストティーチャーの活用は、大変効果的であったと思われる。驚きや疑問、課題意識を持たせるための生きた資料となったことはもちろんのこと、ゲストティーチャーの知識や経験は、そのまま児童が表現するための根拠や理由となったからである。5項目で構成した1見開きのノートづくりも習熟してきた。児童は見通しを持って学習に取り組むことができ、全体的に記述量が確実に増加した。また、教師の発言には⊕の記号を付けたり同様の意見には矢印で結んだりするなど、児童のアイデアで記号の活用が広がり(図7)、根拠の表し方も多様化してきた。よって、課題にせまる資料提示や記号による思考過程の可視化を用いたノートは、児童が根拠を明確にして考え、表現するために有効であったと考える。

しかし、本時では2段階目の考える活動が活発に行えなかったという反省点があった。新たな気づきを与えたり、他者の意見を取り入れたりするためには、グループ活動を行うなど学習形態の工夫も考えていかなければならない。

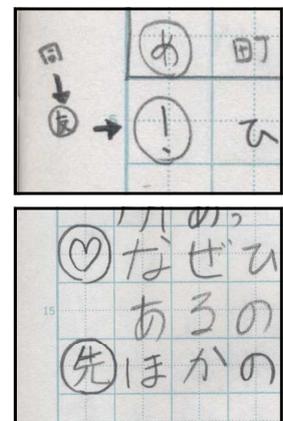


図7 記号活用の広がり